



学齢期の支援～コミュニケーションに視点をあてて～

元特別支援学校教員 野畑光代 氏

2018年度の3月まで特別支援学校の教員をされていた野畑氏は、現在、児童発達支援の療育や小学校の教育相談、成人の生活介護のコンサルタントをされているとのこと。今回のセミナーでは、支援学校教員時の事例を中心に、「コミュニケーション」をキーワードとして、学齢期の支援についてお話いただきました。

* コミュニケーションなしの信頼関係はありえない！

信頼関係は自然にできるものではない。努力や工夫をして築き上げていくもの。「無理解は人への不信感・拒否感を強めてしまう！」ので、まずは ASD の特性を理解したうえで、「ASD だから何でも許す」のではなく、ひとりひとり違う理解レベル、特性、学習パターン等、その人に合った教え方で、守るべき社会のルールやマナー・危ない時の制止を伝えていく必要がある。

* コミュニケーション支援なくして、ASD 者と家族の穏やかな生活はない！

理解コミュニケーションの支援

構造化の考え方に基づく工夫で、その人が納得できるように「伝える」

表出性コミュニケーションの支援

①支援者側が特性を理解する ⇔ ②コミュニケーションサンプルを取る ⇔ ③好きなこと・伝えたいことからスタート ⇔ ④本人が「～したら要求が実現する」経験を積み重ねる ⇔ ⑤コミュニケーションの広がり ⇔ ⑥問題行動の予防（機能的コミュニケーション） ⇔ ⑦相互性の育ち（交渉）
…という流れを意識して支援を組み立てる。

* 好子として、何か使えるものはないか？

コミュニケーションスキルを向上させるための好子として使えるものに常に目を光らせている。まずは、コミュニケーションの便利さを経験してほしいので、本人にとって伝える必然性が高いこだわり・ブーム、時には好子（強化子）として用いる。

また、衝動性が強く、自分でできると「やってしまう」方の場合、伝えないと出来ない場面を設定してコミュニケーションを引き出している。

しかし、要求が出せることの過大評価には注意。即時に自分の要求通りにならないと気が済まず怒り出すような「要求大魔王」を作ってはいけない！要求が出せるようになったことで満足しないで、交渉ができようになるべき。「交渉することも悪くないな～」というおいしい条件を提示することがコツ。

* 機能的コミュニケーションの向上は情緒の安定につながっている。

伝えられることが保障されていると、本人に自覚されるとパニックになる必要がなくなる。コミュニケーションの成功体験を積むためにも、コミュニケーションのツールを用意することは支援者の義務。使うところに使えるツールを設定しておく工夫をすべき。

☆野畑先生の実践事例をご紹介します☆

理解コミュニケーションの支援

視覚優位ではあるが、見たものから意味を抽出して、意味理解をすることが苦手な A くん。彼にとって、寄宿舍や学校から「家に帰れる」ことを意味している大好きなお母さん。そのお母さんのカードをめぐり式スケジュールの最後に置くことで、一週間の見通しを伝えることができました。

いくつかの具体物を手がかりとして、ルーティンを確実に理解することができるので、大きな変化のない日常は大きな混乱なく生活することができる B くん。彼の強みを最大限に活用して伝えることで、麻疹ワクチン接種という難所を乗り越えることができました。

修学旅行の帰りに台風で新幹線が止まり帰宅できない！というトラブルに見舞われた C さん。避けがたいスケジュールの変更を伝えるタイミングと、変更したスケジュールの内容が彼女にとって「意味があるもの」にすることが、キーポイントなり、混乱なく切り抜けることができました。

表出性コミュニケーションの支援

自分から伝えてこない D くんには、(こちらから)聞いてあげればよいということで、特性に応じ、構造化された個別学習を活用してフェーズをあげることで、伝えられる事柄・内容が増えました。以前ならパニックになっていた場面でも、コミュニケーションブックを取り出して伝えることでパニックにならずに済むようになり、ショートステイ時には、本人にも施設の方にも、コミュニケーションツールがあることが安心感となっていました。



「出来ないことがあっても HELP が出せばいい。」

「ことばでなくてもいい。他の方法でいいから、この子とコミュニケーションがとりたい！」という母親の思いから、コミュニケーションブックを活用し、ポケットからブックを取り出して指さして伝えるようになった E さん。欲しいものが伝わること・やりたいことができたときの生活の楽しさが彼女の表情に表れていました。彼女が伝えられる相手が増え、またこれまで母としてきたことを「誰とするか」を伝えたことで、施設での安定した生活に繋がっていきました。



F くんは「なかないわ」(遅延性のエコラリアで音声「なかにわ」と似ている)と言ったり、「ブランコ押して」と伝えれば中庭に行って大好きな砂遊びができるという誤学習がありました。自発の言葉はありましたが、PECS を取り入れたことによって、本当は要求ではない遅延性のエコラリアと要求の言葉の混同を避けたり、伝えたい内容と誤学習によって身に着いた表現のエラーを修正したりすることで、確実に要求が通る経験を積み重ねることができました。



令和元年度 TEACCH プログラム研究会 第6回連続セミナーのお知らせ

日時： 2月15日(土) 13:30-16:30(セミナー) 13:00 受付開始

会場： 千葉県教育会館 501 会議室 (千葉市中央区中央 4-13-10)

セミナー内容： 家庭・学校・施設の実践報告

講師： 保護者・教員・施設職員

《編集後記》 こちらから伝えるばかりでなく、ASD のご本人が自分で「伝えられる」ことの大切さを再考することができました。ご本人からのコミュニケーションを受け取る心の余裕をもちたいと思いました。(岡村)

